

114  
A 4108



神道振作ノ方法ヲ設ケテ實際施行シ政府ノ特殊  
保護ヲ請願スル建言

方今各国對峙ノ際国家ノ制度文物日ニ改良ニ百般事業  
概ニ緒ニ就クヲ得此隆運ノ時ニ方リ皇國神道ノ一事  
ニ萎靡振ハサルモノハ特リ何ソヤ是教法ノ純善ナラサルニ  
非ス其施設方法ノ適當ヲ得サルニ在リ余輩百方焦心  
苦慮スト雖モ一二同志ノ能ク為シ得ヘキ所ニ非ス必ス政府  
ノ特殊保護ヲ仰カサルヲ得ス故ニ尊嚴ヲ冒瀆シ建言スル  
所ナリ此異ハ在廷諸賢ノ英断ニ依リ採納アラニテ切望ス其  
方法左ノ如シ

一官国幣社神官ノ進退ハ特リ官撰ニ止ラス必ス神道管長  
ノ撰擧具状ニ依ルヘキ件

大正十一年四月  
櫻井侯爵郵寄





神官ト教導職トハ其名異リト雖モ其性質ニ至テハ全然  
區別スヘカラス故ニ一人兩職ヲ兼任スルノ成規タリ然ルニ  
教導職ノ進退黜陟ハ悉皆管長ノ具狀ニ依リ神官ノ  
進退ハ特リ官撰ニシテ敢テ管長ニテ涉セシメサルモハ何ソヤ  
蓋シ神官ノ性質ハ官吏ト同トシテ之ヲ政府ニ屬セシメ  
教導職ノ性質ハ政教ニ途ノ元則ニ基キ佛教各宗ノ成立  
ニ準シテ之ヲ人民ニ屬セシメ各舊教部省ノ趣嚮スル所  
ナラニ歟此事タルヤ實際上ノ利害ヲ顧サルノミナラス各宗  
ニ引例スルモ亦其當ヲ得サルモノ、如シ何如トナレハ神官  
進退ハ神道教導ノ為メニ基礎タリ柱石タルノ大關係ア  
レハナリ凡ソ人ハ必ス能否勤惰アルヲ免セス故ニ勤勉ナルハ  
昇陟シ懶惰ナルハ黜斥シ至公至平其器具處ニ應セシ  
メサレハ百般ノ事業決メ其成功ヲ見ルヘキモノニ非ス神道

教導亦然リ其權衡ヲ兼持シ其勤惰ヲ黜陟スルニ  
當リニ官吏ノ撰擇ニ於ケルト平素其學識品行ヲ  
熟知シテ教義ノ盛衰ヲ一身ニ負荷スル管長ノ撰擇  
ニ於ケルト其當否果メ何如ソヤ蓋シ官社ノ神官タルモノハ  
俸給アリテ奉仕スル神社ハ官營ナリ衣食ニ顧念ナキカ  
故ニ布教適任ナルモノヲ撰出スルハ難シトスル所ニ非ス教導  
職ハ之ニ及シ俸給ヲ與ヘス衣食ハ自辨シ教費モ亦他求  
ムヘカラサルカ故ニ十分家産ヲ有シ拔群篤志ニアラサレハ  
此ニ従事スル能ハス其撰出ノ易カラサル決メ官社ノ神官ト  
可比モノニ非ルナリ此難易ノ差別ハ神道教導ノ隆替ニ  
影響ヲ生スルマ至重至大ト謂ハサルヘカラス又各宗ニ準  
擬スルニ神官ト教導職ノ性質ハ猶寺院ノ住職ト僧侶  
教導職トニ於テ區別ナキモノニ同シカルヘシ加之諛寺院



住職ノ手續タルヤ本寺本山等ノ撰擧具状ニ依リテ  
進退ニ其管長其權衡ヲ秉持ス是ニ由テ之ヲ觀レハ  
神官ハ一種特別ノ形ヲ為シ各宗ニ準擬スルヲ得ス  
又神道ニ裨益スルナシ此ノ如クシテ往々官吏ニ屬セシ  
メ管長ニ干涉セシメサレバ其保護ノ道ヨロシキヲ得ル  
ト不可言ナリ願ハ自今官國幣社ノ神官ハ政府特  
撰ヲ除ノ外必ス神道管長ノ具状ニ依リ進退アラシ  
クヲ乞然ルハ政府ノ威嚴ニ於テ寸毫損益ナク却テ  
手數ヲ減シ神道ニ於テハ布教ノ權衡ヲ得テ容易ニ  
振作スルヲ得ヘシ所謂一舉兩全ナルニナラス神官ト  
教道守職ノ名実ヲ完備シテ神道ノ公益淺少ナラザリ  
一神道管長ヲ官撰シテ主御統轄ノ基礎ヲ鞏固ナラシ  
ムヘキ件

神道ノ起原タルヤ天祖天神ノ教ヲ垂レ給フ所皇統  
一系ノ係ル所ニシテ天地ト共ニ立チ生民ト同ク存シ獨リ  
我皇國ノ大經タルニナラス普天下ニ発揚スヘキ惟神自然  
ノ大道タルハ昭々乎トシテ論辨ヲ費サス釋迦教ノ印土ニ  
於ケル儒教ノ漢土ニ於ケル耶蘇教ノ歐米ニ於ケル如ク人ノ  
發明造製ニ係ルモノトハ素ヨリ霄壤ノ差異アルモノナリ  
近今政教ハ各別ナリ祭政ハ混同スヘカラサルノ論起リ之  
ヲ實際ニ試ミ世ノ認テ真理ト為ス所以ノモノハ他ナシ  
歐米各國ノ國體ト教法ニ組織ニ適合シ其國家ニ公益  
アルニ因レハナリ之ヲ我皇國ノ國體ト教法ノ組織ニ照  
準スレハ帝ニ公益ナキノニテラス却テ習慣ヲ破リ國安ヲ  
害スル恐ナキ能ハス加之此論傳播シテヨリ皇國教法ヲ  
尊守信スルモノハ世ノ誹議スル所ト為リ特ニ新聞紙如



キハ喋々論辨シ終此民ヲ驅テ彼ノ教ニ入ラシメントスル  
如キ情况アリ是以所在神社ノ人民共有ニ屬スル府縣  
社以下ノ如キハ從テ衰頹ニ趣キ荒蕪ニ就クハ勢ノ免レ  
サル所亦悲シカラスヤ其此ヲ煽動シ率先スルモノハ  
固ヨリ政府ノ志嚮スル所ニ非ルヘシト雖モ又決メ微力  
寒生ニ出テサルヤ明白ナリ此最辛極難ノ為ニ抗マズ  
屈セス維持シテ今日ニ至リ教會信徒ノ夥多ナルモノハ  
偏ニ教道守職尽力ノ致ス所ナリト雖モ抑又皇國固有  
ノ教法ニミテ人民腦髓ニ薰染シ之レカ習慣ノ效最モ  
居多然而凡ソ事ヲ為スニ方リ主御統轄ノ根柢立  
サレハ四分五裂ノ弊ヲ免セス官國幣社ノ如キハ各  
其一社ヲ限畫シテ氣脉通セス甚シキニ至テハ甲ハ乙ヲ  
壓制シ丙ハ丁ヲ凌侮シ又府縣社以下ノ如キハ日ニ

衰頹ニ自ラ立ツ能ハサルアリ此ノ如クシテ神道ノ盛大  
布教ノ成功ヲ求ム豈亦難カラスヤ之ニ依テ明治五年大教  
院ヲ開設シ教道守職ヲ作興シテ稍ニ布教ノ氣脉ヲ通  
シ六年神道事務局ヲ創建シテ痛ク前弊ヲ矯正シ  
創建大意ヲ編纂シテ皇大神宮祭主ヲシテ神道ノ  
總裁ト為サシメ其他ノ教正之ヲ輔ケ主御統轄ノ  
根柢ヲ立ツヘキ所以ハ既ニ已ニ全國神官教道守職約束シ  
實地施行セントスル際ニ政府ハ俄ニ神道部分ノ制度ヲ  
立テ其目的ヲ中止セシムルハ遺憾亦甚シ去年ニ至リ部  
分廢止ノ一令出テ天下ノ神官教道守職ハ翕然奮起  
シ殆ク蘇生スル如キ情勢アリ此時ニ方リ全國神官  
有志ヲ集メ會議ヲ起シ布教方法如何ヲ討議ス  
或ハ區々ノ論アリト雖モ到底曩キノ目的ヲ施行シ



神道管長ハ前議ノ如ク惟之レカ統轄ヲ一ニシテ教  
義ヲ振作セント欲スルニ在リ今ヤ三品親王久邇宮幸  
ニシテ祭主タリ其任重カラサルニ非ス皇族タリ其身貴  
カラサルニ非ス皇國教法ノ主御統轄ヲ委スルニ於テ最  
適切最允當ナリトス速ニ神道管長ノ特命宣下アラフ  
ニテテ乞願ス特命ノ重キハ分裂潰頽ノ弊害ヲ未兆  
ニ防キ皇族ノ貴キハ皇國神道ノ特殊恒遇ノ榮譽ヲ  
標スヘシ此ノ如クナラハ天下ヲ風靡シ曩キノ教法誹  
議スルモノ自然屏息シ又國體ト教法ノ成立ニ適合シ  
テ終ニ國家ノ公益ト為リ從テ神道ノ基礎ヲ巩固ナ  
ラシムルニ至ラフ

一起業公債金額ノ内若干ヲ神道教導職ニ貸附シ其  
業ヲ興起セムヘキ件

教法ノ能カシヤ心思意想ニ屬シ無形幽微ニシテ手捉  
フル能ハス目視ルヲ得ス其利害得失亦冥々隱匿スト雖モ  
日ヲ累年ヲ積ク久シキ一旦變動スルニ至ルヤ其力能ク  
國家ヲ興起シ又能ク國家ヲ顛覆スルハ古今歴史ニ  
昭々タリ是以統御裁制ノ法ニ於テハ識者ノ深謀遠  
慮スル所ニシテ決メ忽慢ニ附セサルモノナリ經國濟世ノ英  
名ヲ宇内ニ垂カセシ哉因彼得帝ノ遺訓ニ謂アリ  
曰希臘教徒ハ我レ之ヲ慕リ集ルテ絶ヘス怠ルヘカラ  
ス而我ヲシテ其教門ノ柱石トナシ号メ法王ト為サシメ  
以其全權ヲ握ルヘシ此ノ如クシテ敵國中ニ我黨ヲ植  
ユヘシト殷鑑遠カラス目前ニ在ルアリ方今思想上ノ  
事ハ他人ノ牽制シ得サル所ノ公法ニ基キ外國傳教者  
ノ我國居留シ其教法ノ為ニハ金ヲ施シ物ヲ與ヘ百方



誘導すルモノ亦尠シトセス彼レ一人ヲ得レハ即千我レ一人ヲ失  
フナリ千百万人亦然リ蓋シ兵戈ヲ以失フ所ノ地ハ之ヲ復ス  
ルノ期アリト雖モ教法ヲ以亡失スル国土ハ千載復ラス  
此寒心スヘキ恐懼スヘキノ際ナリ外已ニ如此ノ勢カアリ  
内又社會黨ニ倣ヒ頻ニ民權ヲ主張シ吾建國ノ  
體ヲ擾乱シ遂ニ國安ヲ害セント欲スルノ兆アリ此  
時ニ方リ我皇國教法ヲ振作シテ苟モ皇國ノ人民  
タルモノハ悉皆我教域ニ歸入セシメ内ハ以テ民權ノ説  
ヲ挫折シ外ハ以テ洋教ノ害ヲ防禦セント欲シ  
愛國ノ熱心勃々休マス日夜勉強措カサル所ナリト  
雖モ資金闕乏ノ事此レ力障礙ヲ為シ束手傍  
觀ノ謗ヲ免セス然レモ之ヲ官ニ仰クヲ得ス又民ニ  
募ルヘカラス今テマ幸ニ政府起業公債ノ盛舉アリ

其旨趣ノレハ公益ヲ起シ物産繁殖ノ道ヲ開キ内國  
ノ事業ヲ盛ニスルニ在リト果メ然ラハ皇國固有ノ神  
道ハ内國事業ノ重且大ナルモノニ依リ之レニ其金額  
ヲ貸附シ其業ヲ興起セシメ年賦ヲ以元金償却セ  
シムル特殊ノ保護ヲ乞願セントス然ルモ神道之ヲ布  
用途ニ充テ速ニ學識兼備布教適任ノ者數十名ヲ  
撰拔シ各府縣所在ヘ派遣或ハ在勤セシメ該地ノ教  
導職ヲ鼓舞作興スルノミナラス又大ニ人民ノ為メニ  
教道守スルヲアルヘシ凡ソ事業ノ起ラス物産ノ殖サルモノ  
ハ人民ノ知識開ケス耐忍力ノ乏キニ因ル其耐忍ノ氣象  
ヲ發揮シ知識ヲ開達セシムルハ意想ノ愚蒙ヲ破ルニ  
在リ是以專ラ三條教則ニ基キ我國神代ヨリ瑞穂國  
ト稱シ歷聖農政ノ高躅ヲ體認シ今日農産ノ擴



充セサル可ラサル原因及ニ百般事物ノ改良セサル  
可ラサル理由ヲ風教ニ開明ノ化域ニ勸導シ加ルニ死  
後ノ賞罰ヲ明ニシ精神ヲ磨シ氣力ヲ勵マシ奮  
發擔當此ニ從事セハ何カナル頑僻固陋タリ此  
教化ニ服従シ悔悟セサルノ理アラニヤ是余輩實地  
經歷シ毫モ疑ハサル所ナリ苟モ三十五百万ノ心志ヲ  
固結シ屹焉不拔ノ地ニ至リ彼輩ノ狡情黠知ヲ  
廻ラシ百方誘導スルモ終ニ彼黨ヲ植ルニ寸地無カ  
ラシメハ國家ノ公益之過ルモノナシ豈亦慶快ナラサ  
ラシマ苟モ政府ノ保護此ノ如クニシテ振作方法ヲ  
實施セシメハ曩キノ委靡不振ヲ反翻シテ布教  
ノ成功ヲ期スルニ至ルハ猶華族ノ前日ニ於テハ世ノ贅物  
トシ外視スト雖モ一ト度ニ政府ノ保庇アリテ今日ニ

至リ己ニ王室柱礎ノ次女ヲ為スカ如ク加之國體ト  
教法ノ性質起原ニ於テ背馳スル所ナキカ故ニ習慣ヲ  
保有シテ事ニ進歩シ易ク又神官ト教導ヲ職トハ  
聯結一貫シテ支離スル所ナキカ故ニ具力強クシテ效ヲ  
成シ易シ從テ所在神社ノ衰頹ヲ挽回ニ舊觀ニ復  
スルノミナラス一層結構ヲ莊麗ヲ極メ大ニ神道ノ基礎ヲ  
鞏固ナラシムニ然則教法ニ屬スル心志ノ如キハ本根ニ  
テ重シ形貌ニ顯ルニ事業ノ如キハ枝葉ニシテ輕シ請フ  
本末輕重ヲ撰擇シ速ニ採用アラシムヲ其金額受  
授ノ方法ハ別冊ニ附シ命ニ從テ進達スルヲアラシトス  
以上三條ハ皇國々體ノ隆替ニ係リ一日モ忽ニスヘカラサル  
要件ナリ仰北異ハ深ク前途ノ恭否ヲ洞觀シ非常ノ  
裁下アラシムヲ恐惶謹言



明治三年五月

大教正鴻雪爪

右大臣岩倉公閣下

西園公、此書、向、内、院、説、云、  
ハ、禮、儀、身、系、也、也